View+

吹田市の千里緑地に生息するヒメボタルの光跡。地元住民らでつくる「吹田ヒメボタルの会」が景観管理をしたり、毎年個体数の調査をしたりしている＝吹田市で（長時間露光）

「箕川・水とみどりの会」が開催した観察会ではキキョウ科の多年草「ホタルブクロ」を用意。雄のゲンジボタルをそっと入れると、花の中にやわらかな光が浮かんだ＝箕面市で

清き光 次世代にも

箕面、吹田 各地で保護活動や観察会

夕闇の河原や田園を歩くと、淡い光がちらほらと浮かぶ。近くにいた子どもも気づいたようだ。「あっ、ホタルだ」――。かつて当たり前にあった光景は、ずいぶん限られたものになった。しかし府内には今も各地に生息地があり、地元住民らの手で環境が守られている。大阪に今も残るホタルの名所を訪ねた。 【滝川大貴、写真も】

日が沈みきった5月下旬の箕面市・箕川に、親子連れら約40人以上が集う。河川の美化活動をしている「箕川・水とみどりの会」主催のゲンジボタル観察会だ。ホタルの保護には河川の環境保全が欠かせず、日ごろから清掃や除草、植樹活動をしている。勝尾寺川や箕面川など、市内だけでも場所ごとに五つの同様の会がある。

箕面市・勝尾寺川でゆらめくゲンジボタルの光跡＝箕面市で（長時間露光）

観察会では冒頭、「箕面ホタルを守る会」の石田達郎会長(68)が、ゲンジボタルの生態や、この地域のホタルが農薬使用で減ってしまった時代があることを説明した。小学生の参加者は手を挙げて「オスとメスはどうやって見分けるの？」などと元気よく質問を投げかけた。

その後、ホタル探しへ。石田さんが見つけたホタルを花の中に入れてみせるとふんわりとした明かりが点滅した。

市内には他にもヘイケボタルやヒメボタル、クロマドボタルの生息域もあり、それぞれで保護活動をしている。石田さんは「次世代にホタルがある景色を知ってもらうことが一番の保護につながる。川や環境を大切にする入り口にしたい」という。

吹田市の千里第4緑地には、府の準絶滅危惧種で市天然記念物のヒメボタルが生息。5月中旬～6月上旬に見せる乱舞を目当てに多くの見物客が訪れる。

同市の「吹田ヒメボタルの会」は、雑木や、他の植物を追いやるモウソウチクを伐採している。地面に近い植物の光合成を促し、良質な土が生物の多様性を生むという。効果があったのか、1998年から始めた発光数調査は当初の5000程度から2010年ごろに上昇。近年では多い年で1万を超える。

塩田敏治会長(88)は「ヒメボタルはメスが飛べず、生息環境が駄目になってしまうとそのまま絶滅につながってしまう。地道な活動をなんとか続けて次世代にバトンをつなげたい」と話した。

㊨箕面市・小野原公園に設置されている「ヒメボタルベンチ」。「箕面ホタルを守る会」がホタルを知ってもらおうと行政に働きかけて設置した。近くには地域のホタルについて書かれた解説板も

㊧「箕面ホタルを守る会」が開催した観察会で用意されたキキョウ科の多年草「ホタルブクロ」を手に取る子ども

＝いずれも箕面市で